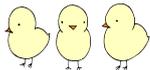


市史だより



がちまやあ



# Gači-majaa

第 31 号・2014年12月15日(月)発行  
年2回 (7・12月発行)

編集・宜野湾市教育委員会 文化課 市史編集係  
〒901-2224

沖縄県宜野湾市真志喜1-25-1  
(宜野湾市立博物館内)



問い合わせ・情報提供先



☎ (098)870-9317

Fax (098)870-9316

E-Mail: [Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp](mailto:Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp)

※宜野湾市役所のホームページで、バックナンバーも公開中!!!

HP: <http://www.city.ginowan.okinawa.jp>

もっと

## 宇地泊を知ろう!



浦添市牧港と隣接する宇地泊<sup>ウチドクマイ</sup>は、宜野湾西海岸地区の南西端にあたり、北東に真志喜、南東に大謝名とはさまれた地域です。ンナトゥと呼ばれる入江が天然の良港となり、近海で漁をする糸満海人の出入も多かったようです。

戦前は碁盤上に家が立ち並び、村屋<sup>ムラヤ</sup>(公民館)の他、砂糖小屋<sup>サトウヤ</sup>が3か所あり、東側に県道が通り、大謝名寄りに軽便鉄道が走っていました。宜野湾村で唯一、半農半漁の村では専業漁師は少数で、男性は農耕の合間に漁労を行い、女性たちは捕れた魚介類を宜野湾・浦添の近隣集落から北は北谷周辺、南は那覇・首里あたりまでカミアチネー(かごに入れた品物を頭にのせて売り歩く)をしていました。

1944(昭和19)年頃は、世帯数119戸、人口約600人でしたが、翌年の沖縄戦により200人以上の人々が亡くなり、村も甚大な損害を受けました。避難して捕虜になった人々は、野嵩収容所に収容された後、大山等へ移りましたが、米軍により土地は接収され「キャンプブーン」となっていたため、1952(昭和27)年、旧集落の一部へ居住が許されるまではすぐに戻ることができませんでした。1969(昭和44)年から「キャンプブーン」の返還が始まり、1974(昭和49)年12月までに土地は全面返還されました。その後区画整理により、北側にあった田芋畑や海岸沿いも埋め立てられ、戦前の半農半漁の村も今は新興住宅街となり、ホテルや大型商業施設が進出して宇地泊近隣も大きく変わりつつあります。



▲宇地泊船だまり 1988(昭和63)年  
「写真集ぎのわん」より



次のページから、さらに詳しく宇地泊についてみましょう。





# かい 海 じん 神 さい 祭

海神祭は旧暦 4 月 1 日に行われる、豊漁と航海安全を海の神様に祈願する行事です。ウミヌウグワン（海の御願）ともいい、宇地泊・真志喜・大山に見られる行事で、供物に蛸たこを用いることから、宇地泊ではタクグワーエーイとも称します。宇地泊には海にまつわる年中行事があり、その中で海神祭は現在でも行われている行事です。宇地泊の海神祭についてみていきましょう。

## 海神祭の流れ（1995(平成 7)年の例：「ぎのわんの西海岸」

前日（旧暦 3 月 30 日）の午前 5 時頃、漁港を出て沖で漁を行います。



戦前は昼に部落中の漁師が網漁をして魚を捕り、夜はイザイたこで蛸を捕っていました。捕獲された魚や蛸は公民館で婦人たちに調理されました。また、宇地泊の漁師は真志喜・大山も漁場としていたので、感謝の意味を込めて真志喜・大山にも魚や蛸を届けたそうです。

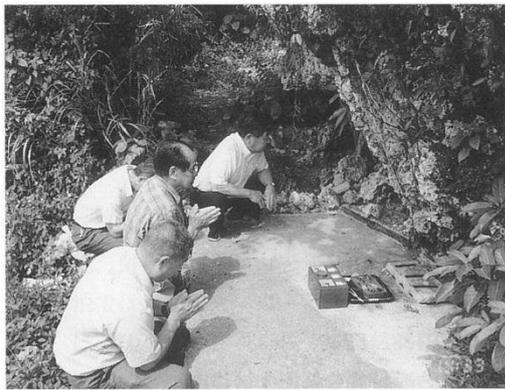
海神祭当日（旧暦 4 月 1 日）の午前 9 時頃には、前日に捕獲した魚を漁業組合の男たちがこしらえ、その魚を公民館で婦人達が調理しました。

巡拝は、午後 2 時 30 分から行い、ヒートゥジー、クンカー、網元宅にある龍宮神への御通し、ウフヤの火の神、公民館敷地内一角に設置された合祀所の順で祈願をしました。参加者は自治会長や関係者数名で、供物は揚げ魚と字のピンス（酒・花米を入れた箱型の祭具）です。

現在宇地泊で漁は行われておらず、海神祭では 4 カ所の拝所を回り祈願のみを行っているそうです。

### 4 カ所の拝所

- ①ウブガー（クンカー）
- ②ヒートゥジー
- ③龍宮神
- ④合祀所（公民館敷地内）



▲ヒートゥジーでの拝み  
「ぎのわんの西海岸」より



▲クンカーでの拝み  
「ぎのわんの西海岸」

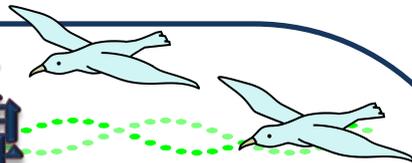
海神って???

海神は海の神様で、海の彼方、ニライカナイの世界から村落に訪れ、作物の豊穰、村の繁栄をもたらしてくれる来訪神です。





# まさごひ 真砂子の碑



宜野湾マリーナ内にある公園の一角に、石碑があります。

左手に浦添市牧港、正面から右手にはコバルトブルーの海が広がる雄大な景色が見えます。

「うちどまり 真砂子  
ていーだる紛らしゆる  
御月 紛らしゆる  
浜の真砂子」

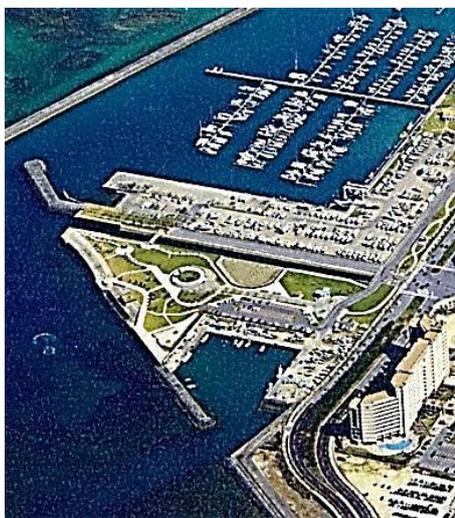


と刻まれています。

(大意) 宇地泊の浜の真砂子は白く 昼は曇りでも日が照っているように人の目を疑わせる。夜は暗夜でも月夜のように人の目を疑わせる。浜の白い真砂のその美しさよ

※真砂子とは細かい砂のこと

「宇地泊節」の歌詞となっているこの琉歌は、光り輝く白い砂浜が、かつて宇地泊にあったことを伝えてくれます。1960年代中頃までの宜野湾は、田園風景と遠浅の海浜の残る自然豊かなところでした。宇地泊は海に面しており、海は人々の生活の糧<sup>かて</sup>であり、憩いの場でもありました。とりわけ、砂浜の景観はすばらしかったそうです。ところが様々な社会背景から、公有水面埋立事業が実施され、開発のため宇地泊の海岸も埋め立てられました。



地域の景色が変化していく中、長老の方々の「子や孫に美しい海岸線が存在していた事を何らかの形で残したい」との声を受け、宇地泊区自治会は市や県に要請を出しました。そして多くの方の尽力により、2007(平成19)年に「真砂子の碑」が建立されました。歌に読まれた浜は今はありませんが、マリーナの公園は季節によって美しい夕陽も見られ、当時が偲ばれます。宇地泊地区の方々の郷里への深い愛情と原風景「海浜と海原」への感謝と誇りは後世へ語り継

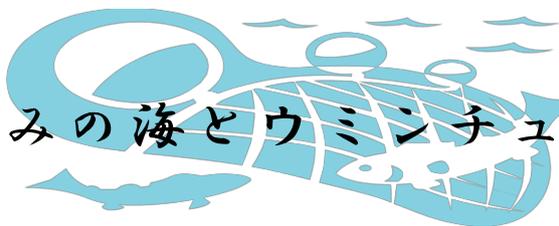
▲現在の海岸線(宇地泊区自治会提供)がれていくことでしょう。

さて、浜の白い真砂子はどこへ行ったのでしょうか？

実は宇地泊の浜の砂は、トロピカルビーチに運ばれたそうです。あなたがすくい取った砂の中にキラリと輝くものがあったら・・・それは宇地泊の浜の真砂子かもしれませんよ！ ☆ ☆ ☆

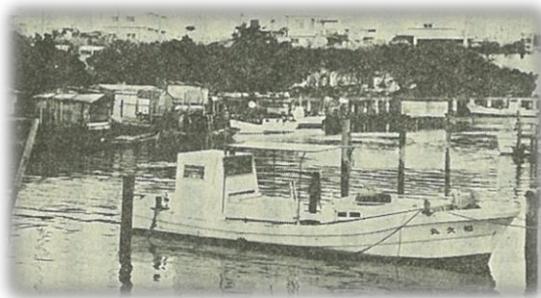


# 恵みの海とウミンチュたち



宇地泊の船着き場

1984（昭和 59）年市史 5 巻より



宜野湾村で海に面している地域は、宇地泊の他に伊佐や大山、真志喜などがあげられますが、漁業を行う人々の数においては、宇地泊が一番多かったようです。ウミンチュ（漁民）は、漁船を操<sup>あやつ</sup>って網漁を専門に行っており、沿岸のイノーでイザイ漁を行うイザヤーとは区別する傾向にありました。彼らは宜野湾地先海域で、日帰り操業を基本とした漁を行っていました。

宇地泊漁民の網漁は、個人かまたは少人数の単位で行っていました。そのほとんどが血縁関係であり、ウミガシラと呼ばれる年長者が全員を取りまとめていました。またウミガシラは、沖縄の伝統的な<sup>はきぶね</sup>剥船であるサバニや網漁具などを多く所有し、それを使用して漁を行っていたといえます。

海域により採れる魚の種類は違いますが、旧暦6～8月頃にはスクが、6～9月頃にはガチュンが毎年群れをなして漁場に現れます。それらは海底に潜むヒチグーや、旧暦6～8月の凧の日にたびたび押し寄せるヒートウの群れと共に、大切な捕獲対象でした。宇地泊周辺の海域は、今でも多くの魚が生息する豊かな自然を残して私たちに引き継がれています。



## 市史編集係事業報告

### ぎのわんのサングウチャー (三月遊び)の調査について



市史編集係では、宜野湾で古くから行われている旧暦3月3日の行事であるサングウチャー(三月遊び)の調査を行っています。調査に何う際は、どうぞよろしくお願ひいたします。

### 市史の職場体験とは？

8月11日(月)から13(水)にかけて、沖縄国際大学から3名のインターンシップがやってきました。慰霊の日を使用した写真パネルの整理や、出版のしおり等の作成をお願いしました。皆さん元気で何事にも一生懸命取り組んでいると感じました。

また、その他に9月4日(木)には、嘉数中学校から職場体験を行うために、2名の生徒が市史にきています。地味な仕事が多いのですが、少しでも市史の内容等を理解してもらえれば、とてもうれしく感じます。

